



コミュニティ誕生から 50 年

—これまで築き上げてきた絆・これからつなげたい絆—

閩市民活動支援課 TEL21-2272 FAX22-5904

今年は、コミュニティ制度が誕生して 50 年を迎えます。さまざまな地域活動がコミュニティセンター（以下、コミセン）を拠点に行われてきました。これまで積み重ねてきた歴史を振り返りながら、私たちの暮らしとコミュニティについて考えてみましょう。

中鯖石地区から取り組みがスタート

コミュニティの始まり

旧・自治省（現・総務省）のモデル・コミュニティ施策事業を導入し、昭和 47（1972）年に市内で初めて中鯖石地区に地区コミュニティ協議会が発足したことが始まりです。

以降、旧町村や小学校区、中学校区の第一生活圏域を単位として各地区で地区コミュニティ協議会が設立され、併せて、活動の拠点となるコミセンが建設されていきました。設立当初、コミセンは公民館の機能も兼ね備えて整備されました。

コミセンに公民館を同居させたところが、他には見られない柏崎独自のスタイルです。学びの場としての公民館と、その学習機能を生かしてコミュニティ活動に結び付けることができる「柏崎方式」は、全国的にも注目される取り組みとなりました。

モデル・コミュニティ施策とは

国が住民参加による自発的な地域活動を行う地区をモデル地区として設定する制度。制度設立初年度の指定地区 40 カ所の 1 つに「中鯖石地区」が選ばれました。



中鯖石コミセン 10 周年事業の様子



公民館とコミセンが同居していたことを示す
枇杷島コミセンの案内看板

コミュニティ新体制の確立

平成 15（2003）年度には「コミュニティ研究委員会」の研究報告を受け、公民館の学習機能とコミュニティの地域活動の2つの機能を一体化し、コミュニティを核にした地域主導の活動システムを目指す新たなコミュニティ方式が導入されました。

現在のように、コミュニティ活動で学び、その成果を自発的な地域づくりに生かしていくという形が定着し、地域主導の活動を行う新しい体制が確立されました。

コミュニティ研究委員会の研究報告とは

平成 13（2001）年度に、コミセンの代表者で組織するコミュニティ研究委員会が「柏崎における新しいコミュニティの理念と提言」を研究報告としてまとめました。

3つの理念 『地域が主導』・『受益者の負担』・『自由な参加』

3つの提言 『コミュニティ経済基盤の確立を図る。』
『コミュニティの事業システムに、地域の実情に合わせた公民館学習を一体的に取り込む。』
『住民運営を基本として、行政とのパートナーシップを創る。』



大きな体育館を持っているコミセンは全国でも珍しい（大洲コミセンの様子）

地域住民主体で活動を実践



地域を歩いてふるさともを知る

これまで実践されてきたコミュニティづくりの原点は、それぞれの活動を通じて、共により住み良い地域をつくり上げていくことであり、地域生活の向上や地域づくりを目的としています。

各地区では、地域の実情に合わせたさまざまな取り組みが行われています。お住まいの地域の活動に関わることで地域の新たな一面が発見できるかもしれません。

地域の特色を生かした活動を展開

地域力の維持・向上に向けて

コミセンでは、各地区の特色を踏まえた「地域コミュニティ計画」を策定して、より良い地域づくりのための活動を行っています。各地区で地域の資源を最大限生かしながら、住民主体のコミュニティづくりが行われ、親睦が図られています。※市には 27 のコミセンがあります。誌面の都合上、一部の紹介になりますことをご了承ください。

世代間交流で、地域を活性化したい！

ハッピーハロウィーン in まつなみ



坂井 美代子 さん



関矢 真諭美 さん



コミュニティ計画策定時に「老若男女問わず楽しく交流し、地域を活性化するハロウィーンをしたい！」という意見が子ども会から出され平成 17 (2005) 年にハッピーハロウィーン in まつなみが始まりました。当初はハロウィーンの認知度が低く、本当に楽しんでもらえるのか不安な面もありました。日本でのハロウィーンイベント先進地である長野県塩尻市への視察や指導をいただくなど交流も長く続き、広い世代が楽しめるように工夫をしています。

お菓子をもらいに仮装して地域の各家庭を回った

り、スタッフも仮装をして子どもも大人も本気で楽しんでいます。

スタッフは多い時で 150 人以上。これまで関わってきた多くのスタッフの熱意と、地域の各家庭の理解・協力により、今では地域外からも遊びに来てくれるようになりました。これからも内容を見直しなが、長く続けていきたいと思っています。

「トリックオアトリートスタート」の合図で、子どもたちが目を輝かせて走り出す。本当に楽しみにしてくれている事が伝わるその姿を見られる事が一番うれしいです。

商店街の活性化と、地域のにぎわいを作りたい！

比角ストリート フェスティバル



田村 光一 さん



後藤 真人 さん



平成 15 (2003) 年、コミセン祭り 25 周年の節目に比角ストリートフェスティバルは始まりました。商店街の空洞化が進む中で地域のつながりが希薄にならないように、商店街との連携や、地域外のお客さんにも来てもらい、地域のにぎわいの場を作りたいという思いがきっかけでした。四谷通りを車両通行止めにする大規模なイベントを、地域住民が知恵と力を出し合って作り上げています。地域には、熱い想いを持った人たちがいて「やるならとことん楽しくやろうよ！」という空気に満

ちています。アイデアを出して実行できる人がいて、それを面白がって関わってくれる人がたくさんいたからこそ長く続けられていると思います。大人たちの心からの笑顔を見られるのはうれしいですね。ストリートフェスティバルをきっかけに、知らない者同士の繋がりができています。子どもからお年寄りまでさまざまな声が飛び交う中で、みんな一緒に楽しめる。和と輪が広がる、比角ストリートフェスティバルです。

他にもいろいろな活動が行われています



花いっぱい運動（田尻コミセン）



子どもの見守り（枇杷島コミセン）



いわしまつり（荒浜コミセン）

災害時にもコミュニティは力を発揮

自らの地域は自らが守る

コミュニティの行事や活動を通して育まれた地域のつながりは、災害時の活動でも生かされています。

平成 19（2007）年に発生した中越沖地震では、地域住民の安否確認、避難所運営、乳幼児や高齢者などの要配慮者支援でコミュニティは大きな力を発揮しました。

日頃の活動で顔の見える関係ができていることが、安全・安心な地域づくりにつながっています。

北鯖石コミセンの防災訓練の様子を紹介します！

北鯖石コミセンでは、中越沖地震が発生した 7 月 16 日を忘れないため、毎年同日に防災訓練を行っています。

毎年趣向を凝らした訓練を実施していて、今年は初めての夜間訓練を予定しています。



避難したことを表す黄色の布を玄関に掲げる



要配慮者をリアカーで運んで避難



応急手当の訓練



消防団と子どもたちで消火訓練

コミュニティのいま

ライフスタイルが変化し、新型コロナウイルス感染症の対策が求められる中、地域が対応すべきニーズが多様化し、複雑化しています。

離れて住む高齢の家族の暮らしが心配。

重労働が大変だと言っていた。
すぐに手伝いにいけない
いでしょうか…

土・日曜も仕事。子どもを安心して預けられる場所があるといいな。

子どもたちのための活動を！



むねとし
大塚 宗俊 さん

土曜こどもくらぶ（剣野）

コミュニティ計画を立てる中で「子どもたちのための活動もしよう！」という声上がり、平成16（2004）年に土曜こどもくらぶがスタートしました。年に何回か土曜日に地域の方が先生となり、小学生が学校や家庭ではできない体験や、知識・知恵などを楽しく学んでいます。ボランティアとして毎回参加する、私や関矢さん、滝沢さんは「地域のおじいちゃん先生、おばあちゃん先生」として子どもたちの活動をサポートしています。本当の孫を面倒見るように愛情を注いで接しています。

最初は緊張していた子どもたちもすぐに仲良くなり、互いに助け合うようになります。保護者からは「子どもたちが本当に喜んでいる」といううれしい声が届きます。

一番楽しかったのは、お弁当を持ってバスで出かける「ぼうけん旅行」ですね。マリニピア日本海や新潟空港にも行きました。来年あたり、またSLばんえつ物語号にみんなで乗りたいなと計画しています。

この里を活かし この里を守り この里で生きる！



せいや
池嶋 聖也 さん



まさひろ
小林 昌弘 さん

べつまたサポート

別俣コミセンは昭和60（1985）年に誕生しました。35年以上経ち、戸数が34%、人口が60%それぞれ減っています。

15年前から話し合いを重ね「地域みんなで力を合わせて頑張っていこう」という思いを共有してきました。そして令和元（2019）年、地域の人が本当に必要としていることを把握するために、小学生以上の住民全員にアンケートを取りました。さまざまなニーズを分類し、優先順位を付け、令和3（2021）年スタートしたのが「べつまたサポート」です。別俣地域に住む人が生涯に渡って安心・安全に暮らせるように、助け合える地域づくりを進める活動で、地域内に住む75歳以上の方を対象に除草・買い物などの作業支援や、病院などへの外出付き添いを行っています。運営主体は別俣コミセンの未来推進部が担っています。

利用者や家族などからの「ありがとう」の一言を胸に、これからもより使いやすく便利な活動にしていきます。

コミュニティのこれから

防災や福祉分野で地域連携のニーズが高まる中、地域の居場所としての機能が求められています。子どもから高齢者まで世代を超えた活動を通して、地域で顔の見える関係性づくりを継続していくことが重要です。

刈羽節成きゅうりと世代間交流（西中通）

きゅうりがつなぐ縁



左から、河合 正樹さん、
末崎 雅英さん、河合 みち子さん

刈羽節成きゅうりは西中通地域で栽培されていた在来品種で、一度栽培が途絶えましたが、平成 20（2008）年に保存されている種がある事が分かり、地元農家を中心に栽培が再開されました。

小学生との交流は平成 21（2009）年から始まり、今は毎年槇原小学校の 6 年生と交流しています。児童とは栽培や調理だけでなく、出荷や販売まで一緒に取り組みます。「一番の肥料はみんなの足音だよ」と教えると、きゅうり畑を走り回りたくさん足音を聞かせてくれる子、苗に名前を付けて育ててくれる子など、さまざまな子どもたちと触れ合えることがうれしいです。毎年春になると、今年はどんな子どもたちに会えるか楽しみになります。「おいしい漬物を作ってね」と言われると「頑張らないと！」と思います。きゅうりのおかげで、地域のつながりが保てています。きゅうりがつなぐ、大切な縁ですね。

コミセン茶屋・寺子屋（米山）

健康で心豊かな生活を後押し

コミセン茶屋は米山地域の特産である海産物などを試食しながら集う、地域の憩いの場として平成 22（2010）年に始まりました。笠島で採れるエゴ、胞姫神社にちなんだ弁慶の力餅、青海川の鮭料理などをお出ししました。せっかく皆さんに集ってもらうので、地域の歴史や健康の話などを聞いてもらおうとコミセン寺子屋が始まりました。歴史講座や健康教室、リサیتال、米山保育園のお遊戯会など多分野です。

高齢の方も参加しやすいように、コミセン茶屋と寺子屋の日に合わせジャンボタクシーを運行する時もあります。「身近なコミセンで気軽に集い、遠くに行かなくても学習や文化に触れることができうれしい」と喜ばれています。

コロナ禍でコミセン茶屋はお休みしていますが、給食ボランティアさんはいつでも活動できるように準備して待っています。



左から、茂田井 美治さん、
廣瀬 悟さん、黒崎 みな子さん



誰でも気軽に参加できる場所…それがコミュニティセンターです。
これからも身近な地域で安心して、楽しく過ごせるように
まずはコミュニティセンターに行ってみませんか。